

人物表

西島 (36)

美大を卒業後、絵で食べていく夢を諦めきれず、就職活動に乗り遅れる。縁故で今の職場に入社。食品工場部門に配属になる。今も密かに家庭より夢を追い続け、最近はおさんと衝突も多い。クリスマス前にもやらかしてしまい、おさんは実家に帰ってしまいが、子供のために戻ってくる。

田山 (52)

悪い人ではないが、デリカシーに欠ける言動があり、周りをイラつかせる。心根は優しい所もあるので、いきなり妙にいいことを言う。以前の職場では、営業を担当していたが、不景気のため若い課長からリストラ宣告を受けた。麗子のことは好みのタイプ。

漆咲麗子 (35)

高卒。勤務態度は至って真面目。華々しい名前だが、地味な印象。よく見ると美人タイプ。辛口で、冗談を通じる時と通じない時の差が激しい。一匹狼で、あまり人とは群れない。ミステリアスな所がある。

ニュースキャスター 丁寧で優しい語り口には定評がある。仕切るのがうまい。固い放送局の出身。

中部北陸地区・大型ショッピングセンター「ロイヤル」の食品工場。
その休憩室で、TVを見ている西島（36）。
ニュースキャスターの声が聞こえてくる。

ニュースキャスターの声 南町の工場で、24日、製造するチョコレート菓
子の一部に、画びょうが混入していたとして、製品計約150個の自
主回収を始めたと明らかにしました。

西島 おいおいまた異物混入かよ。うちもひとごとじゃないな。

そこへ休憩に入った麗子が、休憩用手提げ袋を下げ、入ってくる。

西島 ああ、麗子さん、見てくださいよ。また異物混入ですって。

無言で着席する麗子（35）。
と、田山（52）が入って罵声をあげる。

田山 どいや！あんた、さっきのどうゆう意味や？！

麗子 思ったことを言っただけです。

田山 思ったことを言っただけやとおく

西島 まあまあ、お二人！

西島、立ち上がり、二人分の茶碗に茶を入れる。

田山 この女が、わしの手際が悪いからってえ、クビにせえいうてきた
んや！

田山、作業帽を机にたたきつける。

麗子 真実を言っただけです。

田山 ああ？！ なんやとおく？！

麗子 そんな風だから前の職場でもリストラされたんでしょ。仕事で
きない割に我だけは強いから。

田山 お前もういっぺんいってみく？！

西島 はいはい、お二人！（と、田山に茶を渡す）今、ニュース見
ました？また異物混入ですって。今度は南町で。

ニュースキヤスターの声が聞こえてくる。

ニュースキヤスターの声 再び残念な事件が起きました。異物混入騒動、これで3件目です。

西島 今日クリスマススイブだったのに。ほんとわけわかんないことする奴っているんですね。

田山 おいや、世の中には変な奴がおっからなあ。(茶を飲みながら) っつかし、今日は忙しかったわいや。

西島 うちの莓ケーキ、ショッピンングスパーの割にまあまあ旨いっスからね。今日は最後のラッシュですよ。

田山 西島君、もう奥さん、実家から帰ってきたんやろ？

西島、飲んだお茶にむせる。

西島 (焦って)へえ?!急に何ですか!

田山 わしは西島君のことは何でも知っているんだよう。奥さん、ようやく実家から帰ってきたんやろ?

西島 (耳をつまんで)うるさいです、うるさいです。

麗子 西島さん、奥さんと喧嘩でもしたんですか? してない、してない。

田山 今宵はイブやしなあ。家族水入らずで仲良くせな。もちろん娘さんにはクリスマスプレゼント、買ってあるんやろうなあ?

西島 (ハットするが)昨日、今日とラッシュだったんですよ、そんな買いに行く暇がどこにあるんですか!

田山 はああ、そういうところがいけないんだよ。そうゆうところがね。

麗子、だるそうに肩をもみながら、手提げ袋から、ファッション雑誌と、酔こんぶを取り出す。酔こんぶを口に運び、雑誌をめくる。

麗子 おいくつなんですか?娘さん。

西島 もうすぐ2歳です。(うれしそうに)写メ見ます?(麗子に写メを見せる)

田山 2歳。2歳のころってどんなもんやったっけ。

西島 もうあっちこっち動き回って目が離せないですよ!ま、可愛いんですけどね。今日は僕が久しぶりに風呂入れる日で。だから申し訳ないですが、今日は早めに上がらせて頂きます。田山さん、

田山 お子さんは？
うちは息子が二人。下のは高校生、上のは東京に行ったきりや。

西島 向こうでバリバリ働いてるんじゃないですか？

田山 いやいや、最近は連絡もさっぱりよこさんしようわからんちゃ。そうや、(思い出したように)西島君は、確か東京の美大出身やったなあ！

西島 僕にとつて、無かったことにしている過去です。(嫌そうな顔)
麗子 三鷹美大・でしたっけ？

田山 ほお有名美術大。

西島 だからやめてくださいよ・

田山 ほら未(いま)だ趣味にかまけて家庭生活がおろそかになつて
るから。

西島 はあ。

田山 (励ますように) まあまあ、人生いろいろあるっちゃ。あれや、
今の言葉でゆう、「黒歴史」ちゅうやつや。

麗子 黒歴史？

田山 そうや。今時の若者がよお使つとる。自身のいじくられたく
ない過去ちゅうとこや。

西島 黒歴史か・

西島、絵の具が入り込んだ指先を見てひたる。

田山 ははん。わしも前の職場のことは、「黒歴史」や。わしの営業能
力をあんの若造が、なくんこうてくれんかったんや！営業のいろ
はもしらんくせになあ、わかつたようなことぬかしやがつて・

田山、突然ひとり立ち上がる。

田山 (低い声で)・・・クソが。正直あんな奴死ねばいいんや！！

田山、くやしさを怒りのあまり、歯を食いしばり、目をつむる。
間。

西島 田山さん・・・。

田山 (西島の呼びかけに我に返り)・・・はあ・・・はは。あんた、あんた
は？どこの大学なん？いつも帰ってなんしとるんや。

麗子、一瞥する。

田山 ふんっ・・愛想のない女や。西島君はこんなタイプじゃないやろ。

西島 そーゆうのって、セクハラっていうんですよ！（麗子に）ねえ？

麗子、酢こんぶを食べながらファッション雑誌の一ページを見ている。

田山、ふいにその雑誌の一部を見て、指をさす。

田山 ああ！！また！この社長夫人や！

西島 我が「ロイヤルショッピングセンター」の弘子常務ですね。さすが。最近メディアにも露出してますね。

田山 相変わらずべっぴんさんやな。いくつや。
西島 確か、麗子さんと同年代位じゃないかな。

田山、ぐいっと身を乗り出し、雑誌を見る。

田山 なになに。（雑誌を読み上げ）バッグの中身、見せちゃいます！えくと、海外出張などの、移動中、酢こんぶを、「ちよこつと食い」しています♥大好きなんです♥酢こんぶう？おお！あんたと一緒や。

田山、麗子の酢こんぶを指さす。麗子、田山の方を見る。
田山、雑誌を引っ張りとり、文字を続けて読む。

田山 このバッグは主人から頂いた、シア、シア、シヤネル？のバッグです。大切に使っています。ちっさいバッグやなあ。
あんたの（麗子の、休憩用手提げ袋をじろじろ見て）ビニル袋の方が、何が入ってるか一目瞭然。よっほど実用的やなく。

田山、満足気に、うんうんとうなづく。

麗子 （無表情で）さつきからうるさいですよ。
田山 どいや？思ったことを、言うとするまでや？。

麗子、立ち上がり、田山にとられたファッション雑誌を勢いよくひっぱりとる。

麗子 どいや！おいや！そいや！ぞいや！やれ黒歴史だあ？知ってま

す？おじさんがどんなに若者言葉を使おうとも古いんです！それが新しければ新しい程に、古いんです！西島さんが必死で合わせてるのわからないの？こういうの金沢弁でなんて言うんです！たっけ！？ ああそうだ（立ち上がり）いじくらしいく！！

西島、掴み合いにこうとする麗子の肩を、両手で大きく受け止め制する。

西島 よおし！！よおしよし！！どう、どう、どう！（馬を落ち着かせる動き）

と、西島の携帯が鳴る。

西島 すみません！すみません！

西島、急いで隅に行き、携帯の画面を見て、着信相手を確認、ため息をつき、出る。

西島 もしもし？今取り込み中！わかってるって！今日俺風呂だろ？はああ・・・？知らないよ・・・違う・・・、だから、そういう意味じゃなくて！（ブツツと電話が切れる）もしもし！もしもし？！もしもくし・・・はあ。嫁さんもう家着いたみたいですよ。あ、麗子さん、落ち着きましたか！

西島、麗子の方に目をやる。

麗子 ・・落ち着いたってどうか、奥さん、大丈夫なんですか。

西島 じき上がるんで。後で何とかフオロします。（苦い顔）

田山 ・・（麗子に）なんや。俺だって別に、あんたを馬鹿にしたわけじゃないわいや。ただ今、若い子らの間で、酢こんぶ食うのはやっとなるんかなと思っただけや。

麗子 ふん。

麗子座り酢こんぶを淡々とつまむ。

田山 なんや、どんだけ好きなんや酢こんぶ。
麗子 ・・・。

ニュースキャスターの声 異物混入は、食品メーカーにとって最も頭の痛い問題で、まして今回は画びょうですからね。

西島、TVのニュースを見て、茶を一杯入れて飲む。

西島 ほんとうちもひとごとじゃないよ。やっぱり管理する方も、限界ってあるからなあ。

田山 まあ、世の中なんて不公平なもんやからな。イライラくつとして変な気起こす輩（やから）がおるんやろう。

西島 あ、そうだ、お二方、（メモを取り出し）来月のシフトなんですけど、希望あります？

田山 私は深夜。

西島 はいはい深夜と。田山さん、今月残業ありましたよね。ちょっと休み入れます？

田山 稼げるときに稼いどかんと・・・。
西島 わかりました。

西島メモに書き込む。

西島 麗子さんは、いつものように月曜、金曜、9時4時、ですね？
田山 ふんっ。気楽なもんや。

メモをとる西島。突然、痛そうに顔をしかめる。

麗子 西島さん、手。

西島メモを取りながら、

西島 （笑顔）少し、痛いだけです。

田山 なんや、腱鞘炎かあ？（茶かして）お前、いったいどんな絵の書き方してるんや。

西島 ・・田山さんには言いたくないです・・

ビービービー今度は内線電話がなる。西島出る。

西島 もしもろし！お疲れ様です・・・え、なんだったって？
間。

ガチャン内線電話を切る。西島静止する。

西島　うちの苺ケーキに・・・異物が混入してるって・・・。

田山　ああ?!!

西島　（状況が掴めず、）選別機ではねられて・・・、明らかに故意にやったもんだって・・・。

田山　嘘やろ!!

西島　（動転して）俺・・・呼ばれたんで・・・ちよつと・・・。

田山　西島、その場から走り去る。

田山　（狼狽して）どいや!!こんな日に・・・誰が!わしら、わしらが疑われるんじゃないか・・・なあ?!!（麗子を見る。）

麗子、雑誌に目を落とし、動かず、静かに興奮している。

田山　（慎重に、言葉を選んで）・・・お前何で・・・そんな・・・落ち着いとるんや。

麗子　・・・。
田山　もしかして、お前・・・（動揺して少し笑って）まさか・・・お前が？

田山、困惑した様子でつめ寄る。

田山　何黙つとるんや。なあ、何とか言えや!!

田山、麗子に掴みかかるが、麗子、雑誌を見ながら、

麗子　来年はピンクが流行（はや）るのかあ。ふうん。

田山、啞然とする。

田山　お前がやったのか?!お前、自分が何をしたのかわかってるのか・・・こんなこと、外部に広まったら、この会社、つぶれてしもぞ!!

麗子、開いてある雑誌の弘子常務のページをしげしげと見る。

麗子 田山 麗子
それは、おもしろいですね。
は？

どうなるんでしょう？まずはマスコミがやっぱ駆けつけるんですかね？ケーキの中に異物混入！夕方のニュースで、ババァンってトップで取り上げられて？それ見た町の人らがわいわい騒いで・・・うん、だけど、案外このショッピングセンター、なくならないんじゃないかな。

田山 麗子

何言ってる？

田山 麗子
死ねばいいんですよ、こんな会社。

麗子 田山

麗子 田山
あるんです私にも、黒歴史。

長めの間。

麗子、ゆっくりと話し始める。

麗子

実家は昔、この町で洋菓子店をしていました。小さな店。でも、地元の人には人気があって。クリスマスと、誕生日と、何か特別なことがあった日には、「パティスリー・レーヴ」の苺ケーキでお祝いねって。

田山 麗子

「パティスリー・レーヴ」何か、聞いたことあるな。

田山 麗子
父はその店でオーナーとパティシエを、母は接客をしていました。私は小さいころから、そんな家族が自慢でした。
・・・

田山

西島、例の異物混入された、苺ホールケーキを片手に、戻ってくる。中に入りそびれ、休憩室の隅で立ち聞いている。

麗子

ある時、この町に大きなショッピングセンターができました。そこにはなんでも揃っていました・・・。シャッター街。聞いたことありませんか？小さな商店は皆廃れました。うちもそうです。
・・・

田山 麗子

父は借金をつくり苦労して、死にました。母もその後、病に倒

田山

れ、介護もあって・・・。

麗子

（声を荒げて）腹がたつのは、この町の人に対してです！！ムカ

つくのは、この街の人の「笑顔」です！皆すっかりうちのことな

田山　　んて忘れてしまった。自慢の家族の思い出は、ただの時代の波に飲み込まれた、哀れな・・・

田山　　哀れな？

麗子、うつむいている。
間。

田山　　あまり難しく考えるな。

麗子　　・・・。

田山　　「時代」なんて言葉、まだまだ、あんたらの年代で使わんでもいいんや。

麗子　　・・・。

田山　　ひとりで荷が重すぎるなら、誰かを頼ればいい。

麗子　　・・・。（それなりに田山の言葉を噛みしめている。）

田山　　黒歴史、ね・・・。わしなりの解釈があるんや。「黒歴史」、それがどうした、ちゅう話や。そんなもん自分しだい、こう、酒の肴からねえちゃんを口説くときのネタにもなるし。会話に花が咲いたり。ほら、こう、わしのように、いぶし銀の魅力を出すのにもだな。

麗子　　（笑って）まあ！いぶし銀！？そんな魅力いらぬ。

麗子、立ち上がり、

麗子　　（意を決して）私も・・・主任のもとへ行ってきます。

麗子、工場へ向かおうとする。

ふいに西島、異物混入された、苺ホールケーキを手に二人の前に現れる。

西島　　メリークリスマス・・・。

田山　　これが例の！

見れば、ホールケーキのど真ん中に、おもちゃの人形が頭から突き刺さっている。

麗子、西島に、

麗子　　西島さん、実は私が異物混・・・

麗子の言葉を遮って、田山、まじまじとケーキを見ながら、

田山 なんとまあ大胆な……。西島君これ、異物混入じゃなくて、

異物トッピング！にはならないかな？

西島 それは不謹慎ですよ。

田山 まあな。

西島、苦しい表情をしながら、

西島 これはあく……。異物かな。

田山 え？

西島 異物じゃなくて、クリスマスマスプレゼントじゃないかなあ、だって今日ほらイブだし？ケーキの中に、結婚指輪が入ってるサプライズあるじゃないですか。あんな感覚？

田山、ケーキの中からおもちやを取る。おもちやは、ウサギの人形だった。麗子、つぶやく。

麗子 シルバニアファミリーのショコラウサギ……。集めてたんです。小さい頃、クリスマスにお店が閉まるまで、よく遊んでて。
(懐かしい目)

西島、決心する。

西島 麗子さん。僕は普段の仕事熱心な麗子さんを信じて、これは「聖夜の出来心」として処理します。

西島、始末書を記入し始める。

麗子 ……。

麗子、へたり込んで、肩を震わせる。他の二人は、努めて明るく振る舞う。

と、プルルル西島の携帯が鳴る。西島、(着信相手は嫁さん) 急いで出る。

西島 もしもし、俺！だからあわかってるよ！今日風呂だろう？

片づけ始めた西島、手を止める。

西島 え、俺宛の？。それ絵画コンクールからの電話だよ！すぐ、すぐ帰るから。

西島、電話を切る。

田山 何か賞でも受賞したんか。

西島 (片づけながら) いや！まだわかんないんですけどね！

田山 今宵はとんだ日だな、西島君。でもまあ良かったな、娘さんにもひとつプレゼントもできたことだし。

田山、先ほどのホールケーキの、シヨクラうさぎを、西島と目が合うように突き刺しなおし、掲げる。西島、それを見て、

西島 だからあゝ・・・やめてくださいよ・・・。

幕

おしまい